琉球大学学術リポジトリ

[論説]
高齢者における観光ボランティアガイド活動の特徴と継続要因：今帰仁グスクを学ぶ会を事例に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 沖縄地理学会 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 卯田, 卓矢 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017674

沖縄地理　第 18 号
1-16 頁　　（2018）

Okinawa Journal of Geographical Studies
No.18, p. 1-16　　（2018）

高齢者における観光ボランティアガイド活動の特徴と継続要因
――今帰仁グスクを学ぶ会を事例に――

卯 田 卓 矢
（名桜大学国際学群）

Characteristics and Continuation Factors of Volunteer Tour Guide Activities in the elderly : A Case of Nakijingusuku Wo Manabukai

UDA Takuya
(*Faculty of International Studies, Meio University)

摘要

本稿は今帰仁グスクを学ぶ会を事例に，高齢者のボランティアガイド活動の特徴とその継続要因を検討した．その結果，学ぶ会における高齢のボランティアガイドは長期に渡り活動を続けているものの，その多くに加齢に伴う身体的機能の変化がみられた．具体的には，体力や筋力の低下，急な体調不良，認知機能の低下などが生じていた．しかし，彼らはこれら様々な影響を単に不安視しながら活動を行っているわけではなく，自身の身体的機能の現状を自覚し，その現状に適した活動環境を再構築していた．一方，学ぶ会による様々な配慮や多様な学習機会，柔軟なガイド基準なども活動の継続に大きな役割を果たしていた．現在，ガイド組織の多くは高齢のボランティアガイドにより成り立っている．そのため，本稿で解明したボランティアガイドとガイド組織それぞれの実践は組織の継続的運営に重要な示唆を与えるものと考えられる．

キーワード：観光ボランティアガイド活動，高齢者，身体的機能，継続要因，今帰仁城跡
Keywords: volunteer tour guide activities, the elderly, physical function, continuation factors, Nakijin castle ruinsarine

Ⅰ　はじめに

1．問題意識

観光形態が多様化する現在，従来の大量消費型の観光に加えて，地域の歴史や文化，自然環境を「学ぶ」観光のスタイルが定着しつつある（フンク 2008 など）．とくに，離職期を迎えた団塊世代は経済的・時間的なゆとりから，小グループでかつこれまでの観光経験とは異なる学びや交流を介した観光を希求する傾向が強いとされる（松井 2013：85）．この学習型・教養型観光への需要に対し，ホスト側では地域に点在する人文･自然資源を「観光」資源として新たに掘り起こし，それを旅行者の学びにつなげるプログラムが各地で実践されている（大社 2008 など）．そのプログラムの一つに観光ボランティアガイド活動（以下，ガイド活動）がある．ガイド活動とは地域住民や観光関連団体が旅行者に無料または低廉な料金で地域を案内し，学びの機会を提供するものである．旅行者は多様な知識をもったボランティアガイドと地域を直接巡ることで，その地域に従来とは異なる魅力を感じることができる．また，ボランティアガイドにとっ

ては活動を通して自地域の価値を再確認する契機となり，将来的な地域振興の担い手となる可能性を有する（佐々木 2008：233）．

公益社団法人日本観光振興協会の調査によると，2015 年の全国における観光ボランティアガイド組織（以下，ガイド組織）は 1,688，ボランティアガイド人数は約 4 万 4,000 人に上る．また，ガイド組織数は 2002 年ごろから毎年 80 ～ 100 程度増加している[1)]．このガイド組織の所在地を都道府県別にみると，兵庫県が 73 と最も多く，次いで山形県の 68，長野県の 61，宮城県の 56，秋田県の 52 などの順となっており，概して地方圏における組織の設立が目立つ．また，ガイド組織には大別して，エコツアーガイドに代表される自然地域を案内する組織と地域の人文・自然資源を案内する組織があるが，近年の組織数の増加は後者のガイド活動の認知および普及が関係している（横山 2009）．そのことから，ガイド活動は現在，地域が実践する学習型・教養型に着目した観光振興策の一手段として重要視されていることが看取できる．

観光ボランティアガイドに関しては以上の状況を反映して，地理学を含む多分野から研究が進められている[2)]．兼子ほか（2004）は茨城県古河市を事例に，ガイド活動による中心市街地の活性化を検討した．深見（2009）はフィルムツーリズムを契機としたガイド組織の展開と自治体の役割を考察した．また，安福（2014）は地域資源を活用した「内発的観光開発」における観光ボランティアガイドの意義をガイド組織の活動事例を通して明らかにした．

他方で，ガイド活動や組織そのものに焦点を当てた研究もみられる．今井（2003）は中国地方の 7 つのガイド組織を取り上げ，組織運営や活動実態などを報告した．加藤ほか（2003）は統計資料をもとに，ガイド組織の全国的傾向と活動内容の変遷を検討した．林ほか（2012）はガイド活動およびその育成方式がボランティアガイドの向学心に与える影響を分析した．佐竹（2013）は堺観光ボランティア協会を対象に，ガイド組織の発展要因を外的と内的の 2 つの観点から考察した．吉岡ほか（2015）は地域資源の観光資源化への転換におけるボランティアガイドの役割に言及した．阿久津ほか（2016）は若手と高齢のボランティアガイドにおける意識や活動形態の差異を明らかにした上で，若手ボランティアガイドの参加促進の方向性を提示した．また，磯野（2016，2017）はガイド組織の人材育成のあり方を検討する中で，ガイド知識に対する多様な学習機会とそれによる向学心の醸成が重要であることを明らかにした[3)]．さらに，卯田（2018）はこの学習機会の充実が人材育成の文脈だけでなく，メンバー間のコミュニケーションの向上にも寄与していることを指摘した．

以上，先行研究は主に地域振興におけるガイド活動の役割と課題，ガイド組織の実態および運営方法の 2 つの観点から研究が進められてきた．その中で，後者の研究はガイド組織の継続的な運営のあり方を考える上で有用な視点を提供している．ガイド組織は全国的に増加傾向にあるものの，設立後に十分な活動ができず，休止あるいは解散する組織も少なからずみられる．加藤ほか（2003）や横山（2009）などはこのガイド組織の停滞理由として，人材育成の困難やボランティアガイドの高齢化を指摘している．先行研究では人材育成の課題に対し，上記のように多様な学習機会の提供が重要な役割を果たしてることを明らかにした．

一方，もう一つの課題であるボランティアガイドの高齢化についてはこれまで十分に検討されていない．ガイド組織は低廉な報酬や平日および日中の活動時間帯から，参加は就労者ではなく，経済的・時間的に余裕のある定年退職前後の者が中心となる（安 2006）[4)]．これらの参加者は組織にとって貴重な人材ではあるものの，加齢に伴う健康不安から長期的な活動を期待することは難しい．そのため，組織の継続的な運営を考えた場合，高齢よりは若手のボランティアガイドを確保することが有益であるとされる（横山 2009 など）[5)]．

しかしながら，この高齢のボランティアガイドについては，先の阿久津ほか（2016）が若手との比較の中で参加動機に言及しているものの，その活動の詳細は検討されていない．すなわち，高齢のボランティアガイドは実際にどのように活動しているのか，加齢によるガイド活動の影響はどのように現れ，当事者はどう対処しているのか，またその際の組織のサポートはどのように行われて

いるのか，などは深く分析されていない．

加えて，高齢のボランティアガイドの中には高齢でありつつも長期に渡り活動している者が存在する．とくに，近年は「学ぶ」観光への需要拡大から活動を活発化させる組織も一部でみられるが，その中でも活動を休止したり，退会したりすることなくガイド活動を続けている．だが，先行研究では長期的に活動する高齢のボランティアガイドの存在やガイド活動を継続する要件については十分に視野に入れられていない．

ガイド組織の多くは高齢のボランティアガイドにより成り立っている現状がある．そのため，組織の継続的な運営を考えるには若手だけでなく，高齢のボランティアガイドの動態に注目することはきわめて重要であると言える．

2．研究視点と研究目的

観光ボランティアガイドに関わる先行研究では組織の継続性の観点から，高齢のボランティアガイドを総じてネガティブに捉える傾向にあった．この背景には高齢者に対するステレオタイプが少なからず関係していると考えられる．老年学者の古谷野によると，高齢者は従来，加齢に伴う身体的機能の低下により社会的・経済的弱者として，また他者からの支援が必要とされる存在として理解されることが多く，学術分野においても同様の認識が一般的であったという（古谷野 2003：13-22）．

しかし，1980 年代ごろからこの年齢を一括りに捉えた高齢者像は ageism（年齢差別）として，racism（人種差別）や sexism（性差別）とともに人類が克服すべき差別の一つとされ，以降は高齢者の主体性を重視した研究が模索されるようになった（古谷野 2003，前田 2006：1-21）．その中で，主にアメリカの老年学では高齢者を従来の「依存性（relativity）」ではなく「生産性（productivity）」，換言すれば社会に支えられるのではなく，社会を支える側としての活動に着目した研究が進められている（中原 2014 など）．こうした考え方は「プロダクティブ・エイジング（productive aging）」と呼ばれ（バトラー 1998），近年は地理学を含め多くの分野で広がりをみせている（中條 2007 など）．

以上の研究状況の中で，高齢者のボランティア活動を対象とした研究はプロダクティブ・エイジングを可能にする「社会参加の場」の一つとして注目され，これまで主に社会福祉学の分野で研究が蓄積されてきた（中原 2005，藤原・倉岡編 2016）．そこでは，ボランティア活動の参加動機や活動を促す要因のほか，活動による心理的効果および身体的・精神的健康との関係に焦点を当てた研究がみられる．具体的には，高齢者大学の卒業生・在学生（望月ほか 2002）や高齢者介護予防ボランティア・ポイント制度の参加者（竜王 2014，澤岡ほか 2017）などを対象に，ボランティア活動の参加動機と継続意向の要因が分析された[6]．また，岡本（2012）は千葉県市川市の高齢者（65 ～ 84 歳）を無作為抽出し，ボランティア活動および友人・近隣援助活動を促進する要因を検討した．これらの研究によると，高齢者におけるボランティア活動の継続には，参加者の健康状態や活動の充実感，社会貢献意識，組織や地域からの支援などが重要であることが指摘されている．

以上の研究は本稿で対象とする高齢者とガイド活動の関係を考える上で有用な知見を提供している．ただ，ガイド活動は身体を使うこと（徒歩によるガイド）を主たる活動としている点で，ほかのボランティア組織と比べ加齢による身体上の影響が大きいと考えられる．また，継続的な活動を行うためにはボランティア個々の意識や取り組みだけでなく，ボランティア組織のサポートも重要となる．しかし，先行研究では組織が具体的にどのようなサポートを行っているかなどの詳細な分析はなされていない．加えて，ガイド組織やその活動は磯野（2016）が言及するように観光地域の特性によって異なる．そのため，先行研究が少ない現状においては，高齢者の活動実態を地域に即した形で個別具体的に解明することが重要である．

本稿は以上の課題を踏まえ，今帰仁グスクを学ぶ会（以下，学ぶ会）を事例に，高齢者におけるガイド活動の特徴とその継続要因をボランティアガイド個人とガイド組織の両者の取り組みに注目して明らかにする．本稿で対象とする学ぶ会は今帰仁村に所在する世界遺産の今帰仁城跡およびその周辺地域の案内を目的に 2005 年 7 月に設立された．2015 年現在，約 30 人のボランティアガイドに

よりガイド活動が行われている[7]．ボランティアガイドの平均年齢は65歳である．

学ぶ会のガイド利用者数は年間約1万2,000人と多く，この数は設立以降，年々増加傾向にある．また，学ぶ会はガイド業務のほか，今帰仁城跡の調査および研究，勉強会や講演会の開催，ニュースレター・会誌の発行，今帰仁城跡周辺の清掃活動なども行っており，組織の取り組みは多様かつ活発といえる．その中で高齢のボランティアガイドの多くは長期に渡り活動を続けている．そのため，学ぶ会は高齢者によるガイド活動とその継続性を考察する上で重要な対象であると考えられる[8]．

論文構成は以下の通りである．Ⅱは今帰仁村の概要と世界遺産後の今帰仁城跡の動向を概観する．Ⅲは学ぶ会におけるガイド活動の仕組みとガイド知識の学習機会を述べる．Ⅳは高齢のボランティアガイドにおけるガイド活動の実態と加齢への対策を検討する．Ⅴは以上を踏まえ，学ぶ会における高齢のボランティアガイドの継続要因を考察する．

調査方法は学ぶ会の事務局および同会のボランティアガイドへの聞き取りによった．調査は2017年2～4月，6～8月にかけて実施した．

Ⅱ．今帰仁村と今帰仁城跡

1．今帰仁村の概要

国頭郡今帰仁村は沖縄本島北部に位置し，西部に本部町，南部に名護市と接している（図1）．村の南側には標高275mの乙羽岳があり，山麓の北から東の緩傾斜地およびその先の平坦地に集落が点在する．今帰仁村内は19の字（集落）に分かれており，そのうち村の中心は役場や郵便局，銀行などが立地する仲宗根集落である．2018年1月現在の人口は9,488人である．

沖縄県は第3次産業構成比（2014年）が84.5%と全国平均（74.7%）と比べて高い．今帰仁村は村内に後述する著名な観光資源があるものの，第3次産業構成比は69.5%と低く，一方で第1次産業構成比が沖縄県平均を10ポイント近く上回る11%と高率を示している[9]．第1次産業のうち主要産業は農業であり，とくに花き，野菜，スイカなどは生産量が多く，産地化が進んでいる（今帰仁村役場総務課2016）．

今帰仁村の主な観光資源は今帰仁城跡，古宇利島，仲原馬場の松並木などである．そのうち，古宇利島は本部本島北東部に位置する半径約1㎞の離島であり，2005年の古宇利大橋の開通を機に島内に観光施設が建設され，新たな観光地となった．現在は年間を通して外国人を含む多くの観光客が訪れている．ただ，今帰仁村自体は村内に宿泊施設が少ないこと，また本島北部地域の主要な観光スポットである美ら海水族館と近接していることから，村内での滞在時間は少なく，いわゆる素通り型観光であることが課題とされている（池田ほか2008：93-94）．

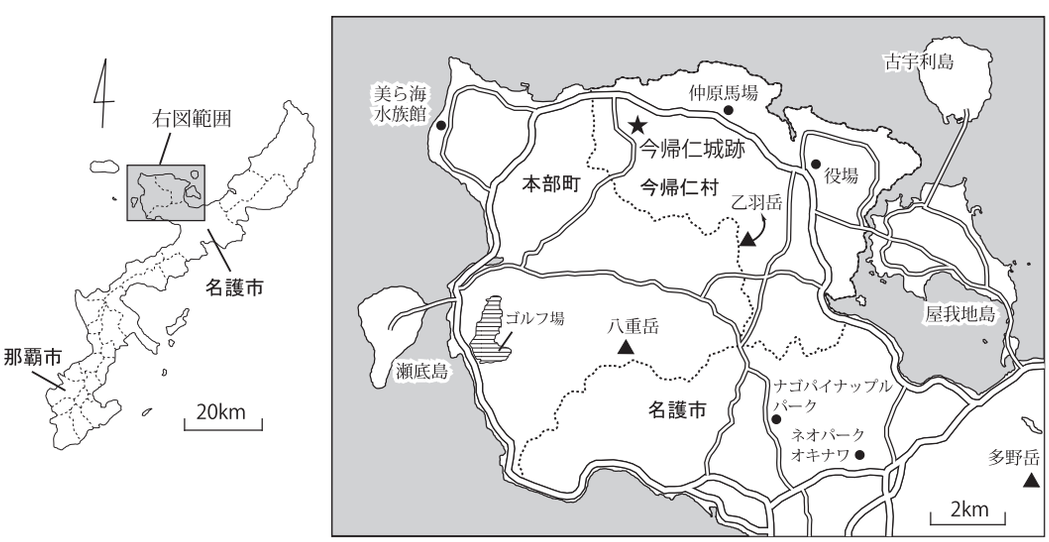

図1　研究対象地域

2. 世界遺産と今帰仁城跡

1）世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の登録

沖縄県は2000年11月に沖縄本島に所在する首里城跡，中城城跡，勝連城跡，今帰仁城跡，斎場御嶽などの9か所が「琉球王国のグスク及び関連遺産群（以下，遺産群）」として世界遺産に登録された．日本では1993年の法隆寺地域の仏教建造物と姫路城の登録以降, 2017年までに文化遺産17件，自然遺産4件の計21件が登録されている．

世界遺産の登録は遺産の保護が本来的な目的であるが，登録を機に観光資源として注目されることが少なくない．そのため，登録施設をもつ自治体では施設周辺の整備や世界遺産を軸とした観光振興策が積極的に展開される．沖縄でも同様に様々な取り組みが進められている．そのうち，斎場御嶽を有する南城市では御嶽の入り口付近に学習施設「緑の館・セーファ」が建設され，また周辺には駐車場，カフェ，土産物店などを備えた物産館が開設された．

また，自治体ではこうしたハード面の整備に加えて，観光客の「学び」の機会提供や交流を重視した取り組みも進められている．その一つに本稿で注目しているガイド活動がある．自治体のパンフレット等によると，2017年現在における遺産群に関わるガイド組織は6つである．主な組織としては, 中城村文化財案内人サークル「グスクの会」，うるま市史跡ガイドの会（勝連城跡），NPO法人那覇市街角ガイド，アマミキヨ浪漫の会（斎場御嶽），本稿の分析対象である学ぶ会などが挙げられる．これらの組織は世界遺産の登録を機に設立，または組織体制の強化が図られた．

2）今帰仁城跡と観光

今帰仁城跡は村の南西部の標高100m前後に位置する．この城跡は琉球統一以前の三山時代である13世紀ごろに北山王が築城した一大グスクであり，1416年の中山による北山平定後は監守（今帰仁按司）が置かれた．その後，1609年の薩摩藩の琉球侵攻の際に焼失し，廃城となった．ただ，監守制度は1665年まで継続し，城跡はそのころまで北山の政治的機能として，また祭祀の重要な拠点として維持された（今帰仁村役場総務課 2016）．現在はグスク時代の主郭や志慶真門郭（しじまじょうかくうーちばる），御内原などの遺構が残っている（図2）．今帰仁城跡はこれらの遺構状況や歴史的価値から復帰後の1972年5月に国の史跡に指定された．

図3は今帰仁城跡における入場者数の推移を示したものである．今帰仁城跡は世界遺産の登録以前から多数のガイドブックに取り上げられていたこともあり，1980～90年代にかけて年間約11万人が訪れていた．その後，2000年に世界遺産に登録されると入場者数は約20～25万人となり，登録以前の約2倍に急増した．

図2　今帰仁城跡（志慶真門郭）
（2016年4月　筆者撮影）

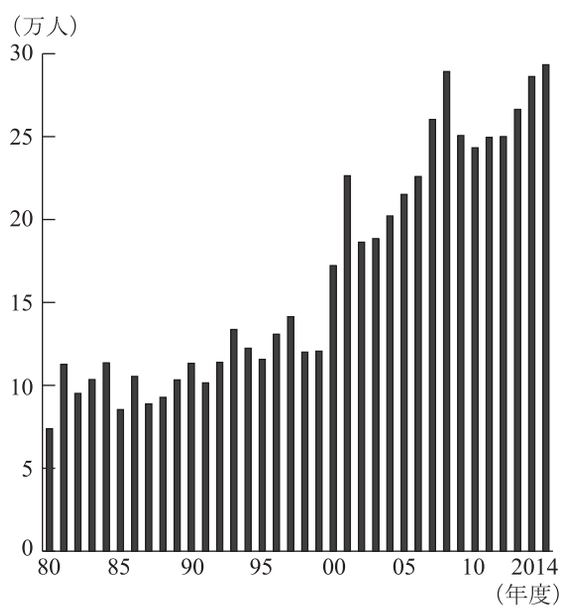

図3　今帰仁城跡の入場者数の推移（1980～2014年）
（今帰仁村提供資料により作成）

今帰仁村はこうした入場者の増加への対策として，2001 年 11 月に「今帰仁城跡周辺整備計画」を策定し，今帰仁城跡内外の売店や鳥居を移動・撤去したほか，2005 年 9 月に券売所，休憩所，展示スペースを備えた今帰仁グスク交流センター（以下，交流センター）を開設した．また，この交流センターと今帰仁村歴史文化センター（1995 年開設）周辺に新たに駐車場を整備し，アクセスの向上を図った．

Ⅲ．今帰仁グスクを学ぶ会におけるガイド活動

1．今帰仁グスクを学ぶ会の概要

1）設立経緯と会員

今帰仁村では今帰仁城跡の観光振興として主に城跡周辺の施設整備が行われてきた．一方で，観光客への「学び」の機会提供や観光客と地域住民の交流といったソフト面の取り組みはあまり重視されてこなかった．今帰仁村はこうした状況を受けて，世界遺産登録から 5 年後の 2005 年に観光ボランティアガイドの人材育成を目的とした「今帰仁城跡案内ガイド養成講座」（以下，講座）を開講した．この講座は今帰仁村教育委員会により同年 5 ～ 7 月にかけて実施され，講義では今帰仁城の歴史を中心に，考古，民俗祭祀，動植物などの幅広いテーマが取り上げられた．受講者は村内に限らず広く募集され，沖縄本島中南部の居住者を含む約 50 人が参加した．

学ぶ会への聞き取りによると，今帰仁村教育委員会は当初，ガイドの運営を講座受講者から数名選び, 1 日 3 回程度案内に充てることを考えていた．しかし，講座終了後に複数の受講者からガイド活動を希望する声が上がった．そのため，有志によるボランティア組織の立ち上げが模索され，同年 7 月に受講者と講座関係者 14 人によって学ぶ会が設立された（卯田 2018）．

また，この講座は学ぶ会の会員追加などを目的に 2005 ～ 2008 年，2010 年，2012 年，2016 年の計 7 回開講されている．この複数回の講座開講によって学ぶ会の会員は増加し，会員数は 2015 年現在,「ガイドの部」と「一般会員・賛助会員の部」を合わせて 90 人を超えた．ガイドの部の総会員数は 47 人（OB・OG を含む）であり，そのうち現在活動中のボランティアガイドは約 30 人である（今帰仁グスクを学ぶ会・編集委員会編 2015：126-127）．

ボランティアガイドの出身地をみると，沖縄県外出身者が全体の約 6 割となっており，沖縄県内出身者を上回っている．学ぶ会によると，県外出身者の多くは定年退職前後に沖縄へ移住し，その後先の講座のことを知り受講したという．ガイド活動への参加動機は元々の興味・関心や生きがいづくり, 社会貢献意識, 時間的･経済的余裕など様々である．他方，県内出身者については今帰仁村出身者のボランティアガイドは少数であり，名護市や中南部出身者が多くを占めている．参加動機は県外出身者と同様に多様である．

2）組織構成と予算

学ぶ会は設立当初から組織づくりを重視し，活動目的や役員構成および選出などを定めた会則に基づき活動している．2014 年改正施行の会則によると，事業内容はガイド活動，学ぶ会会員相互の情報交換，今帰仁城跡の歴史資料の保存利用事業に関する調査および研究，ニュースレター・会誌の発行などの 7 つを掲げている．役員構成は理事長 1 人，副理事長 2 人以内，事務局長 1 人，会計 2 人以内，書記 1 人，理事若干名である．また，組織構成は総会，理事会（月 1 回），役員会の下に事業部，総務部，特別部の 3 部門があり，事業部はガイド業務，研修事業，保全整備事業，地域資源の活用と人材育成の 4 つの活動，総務部は図書の整備拡充, 広報活動, 会員相互の親睦の 3 つの活動, 特別部は創立 10 周年記念事業を行っている．理事会はガイドミーティングとも呼ばれ，1 か月間のガイド活動の報告が行われる．

学ぶ会の年間の運営費は約 310 万円であり，そのうち今帰仁村からの受託費が全体の約 8 割と多い[10]．その他は今帰仁城跡の入場料の一部，後述する有料ガイドの収入，協力金などにより賄われている．歳出の内訳は会員活動費，事業費，図書購入費，通信運搬費などである．その中で，全体の約 6 割と多くを占める会員活動費は主にボランティアガイドのガイド手当て（交通費，弁当代）の費用である．ガイド手当ては会員がガイド活動

を行った際に 1 日 2,500 円，半日 1,000 円が支給されるものである．

2. ガイド活動と実績

1）ガイドの仕組みとコース

学ぶ会のガイドには当日受け付けと事前予約（有料ガイド）の 2 つの形態がある．当日受け付けはガイドの申し込み時間内に希望者が交流センターにあるガイド受付場所に訪れ，申込書に必要事項を記入すれば予約なしでガイドを受けることができる．案内時間はほかの希望者の待ち時間等を考慮し，50 ～ 60 分を基準としている．利用は 1 人から可能であり，料金は無料である．受付場所には平日 2 人，土日祝日 3 人のボランティアガイドが待機し，希望者に対応している．

事前予約は希望者が事前に日時を指定し，ガイドを受けるものである．主に修学旅行生やツアー客などの団体の利用が多くみられる．事前予約の利用料金は有料である．

学ぶ会が提供するガイドコースは城跡内コースと周辺史跡めぐりコースに大別される．城跡内コースは平郎門から石段を上り，大庭（うーみやー），主郭，志慶真門郭，御内原を経て交流センターへ戻るものである（図 4）．このコースは今帰仁城跡をほぼ一周し，城壁や遺構の全体像を見学できる基本コースと位置づけられる．周辺史跡めぐりコースは 2009 年以降に新設された城跡外のコースであり，現在 3 か所が設定されている．具体的には，ハンタ道と呼ばれる今帰仁城跡への登城道を巡る「ハンタ道と周辺遺跡」（所要時間約 120 分），今帰仁城の城下町的機能を有していた今泊集落を巡る「今泊集落の散策」（同約 150 分），今帰仁村内の遺跡を巡る「村内遺跡めぐり」である．これらのコースのうち，前者の城跡内コースは当日受け付けと事前予約のいずれも対応可能であるが，周辺史跡めぐりコースは事前予約のみの利用となっている[11]．

学ぶ会では以上のコースが設定されているものの，ガイド中の説明内容は今帰仁城跡の歴史が現時点で未解明であること，またガイドによる多様な説明を尊重することを理由に，基本部分を除き組織としての明確な基準はない．そのため，ボランティアガイド個々によって説明内容は異なる．

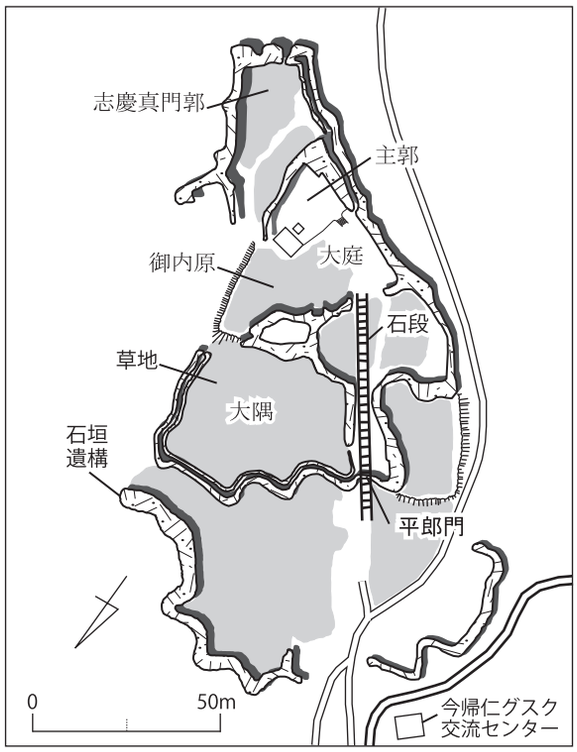

図 4　今帰仁城跡における各遺構の位置
（今帰仁村教育委員会社会教育課編（1999）『国指定史跡 今帰仁城跡環境整備報告書【本文編】』今帰仁村教育委員会，今帰仁城跡周辺マップ等をもとに作成）

会誌『今帰仁グスク』に掲載された各ボランティアガイドの説明内容（「私の今帰仁城跡案内日記」）をみると，同様のコースを巡る中でも説明内容やその強調の箇所に大きな差異がある．なかには周辺の自然や動植物を中心に説明するボランティアガイドも存在する[12]．学ぶ会によると，説明内容は各ボランティアガイドの志向に加えて，利用者の興味・関心に沿うように構成しているという．また，ボランティアガイドからは説明内容に明確な基準がないことで，個々の主体性や責任感が高まるとの声が聞かれた．

2）ガイド実績と利用者特性

図 5 は 2005 ～ 2015 年における案内回数と利用者数の推移を示したものである．2005 年（7 か月間の集計）の案内回数は 2,249 回，利用者数は 1 万 1,092 人であり，設立当初から多くの利用があった．その後も東日本大震災（2011 年）などの一部の年を除き，年間の案内回数は平均約 2,300 回，利用者

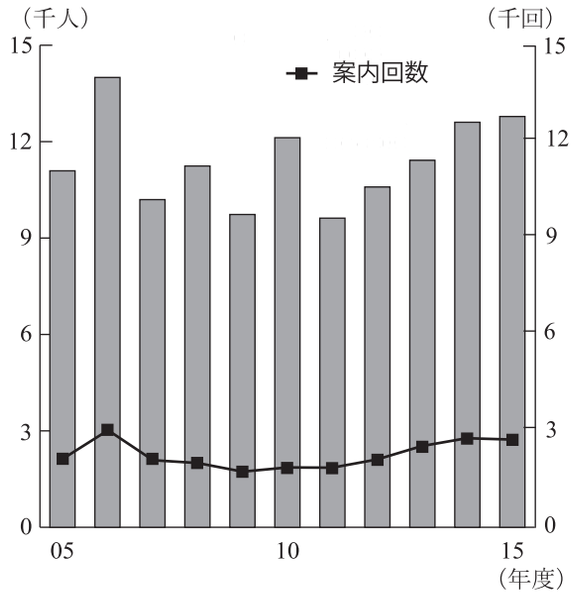

図 5　今帰仁グスクを学ぶ会における案内回数と利用者数の推移（2005 ～ 2015 年）
注 1）2005 年は 7 か月間を集計.
注 2）図の右軸は案内回数，左軸は利用者数を示す.
（今帰仁村提供資料により作成）

数は約 1 万 2,000 人に上っている．2011 ～ 2013 年における案内回数の上位地域をみると（表 1），いずれの時期も大都市圏（東京，大阪，名古屋）からの利用が目立つ．これらの地域は沖縄本島への航空便数が多く，アクセスの良さが関係しているものと推察される．また，沖縄県出身者の利用も少なくないが，これは小中学校が課外学習の一環として訪れているためである．

利用者一組あたりの人数は，集計が行われた 2011 ～ 2013 年の期間のいずれも「2 人」が全体の約 40％と最も高い．次いで，「3 人」と「4 人」がそれぞれ約 14％となっており，一組あたり 2 ～ 4 人の割合が全体の 7 割近くを占めている．また，「10 人以上」も毎年約 1 割の利用がある．

次に，利用者におけるガイドの依頼動機を検討する．利用者が記入する申込書には代表者名，人数，年齢のほかに，ガイドの依頼動機の記入欄がある．この依頼動機には，交流センター付近の案内看板（を見た），ホームページ[13]，宿泊先からの紹介，ガイドブック，タクシー会社からの紹介，その他の項目がある．学ぶ会の集計によると，2011 ～ 2013 年において最も多い動機は案内看板で

表 1　出身地別における年間案内回数の上位 5 位（2011 ～ 2013 年）

	2011 年	2012 年	2013 年
1	東京都	東京都	東京都
2	神奈川県	沖縄県	沖縄県
3	沖縄県	神奈川県	神奈川県
4	大阪府	愛知県	大阪府
5	愛知県	大阪府	愛知県

（今帰仁グスクを学ぶ会・編集委員会編（2015：115-116）により作成）

あり，その割合は全体の 6 ～ 7 割に上る．次いで，ガイドブックが約 10％，ホームページが約 4％などの順となっている．案内看板は学ぶ会の会員が作製したものであり，現在，駐車場と交流センター前に設置されている．この案内看板を介した依頼が多数であることから，利用者の多くは今帰仁城跡へ訪れた際にガイドの利用を思い立っていることがうかがえる．また，学ぶ会によると，依頼動機を案内看板とする利用者は看板設置以降に急増したとされ，案内看板は利用者増加に効果を上げていることがわかる（卯田 2018）．

3. ガイド知識の習得

ガイドの説明内容に関わる知識の習得はガイド活動を行う上で基本的かつ重要な取り組みの一つである．学ぶ会においてガイド知識を習得する機会は，主に「組織による学習機会」と「個人による学習機会」の 2 つの方法がある．

前者は学ぶ会が提供する機会であり，主に勉強会，見学会，研修旅行などがある．そのうち，勉強会は歴史学や考古学，観光学などを専門とする学識者を講師として実施されるものである．勉強会は 2015 年までの 10 年間で計 25 回催されており，これまで「発掘されたグスクと集落」，「これからの観光の行方とニューツーリズム」，「今帰仁上りについて」，「伝統集落景観とフクギ屋敷林」など，今帰仁城跡に限らず様々なテーマが取り上げられている．見学会および研修旅行は今帰仁城跡に関係のある場所やゆかりの地域，県内外および国外の文化遺産などへ訪れ，見識を深めることを目的

表 2　今帰仁グスクを学ぶ会における見学会と研修旅行の訪問先（2005 ～ 2015 年）

年度	学習形態：訪問先
2005 年	9 月　**研修：識名園，玉殿** 11 月　見学：今帰仁村運天区
2006 年	2 月　見学：今帰仁城跡周辺遺跡 4 月　見学：名護城，親川グスク 6 月　**研修：沖永良部島（鹿児島県）** 11 月　見学：斎場御嶽ほか（南城市）
2007 年	3 月　見学：今帰仁村今泊区 7 月　**研修：久高島（南城市）** 12 月　見学：県立博物館美術館
2008 年	3 月　見学：今帰仁村古宇利区 4 月　見学：今帰仁村歴史文化 C 5 月　**研修：伊平屋島，伊是名島** 12 月　見学：県立博物館美術館
2009 年	3 月　見学：国立劇場おきなわ 6 月　**研修：与論島（鹿児島県）**
2010 年	6 月　**研修：久高島，具志川城跡ほか**
2011 年	12 月　**研修：島添大里グスクほか** 12 月　見学：シイナグスク
2012 年	12 月　**研修：勝連城跡，うるま市の史跡**
2013 年	2 月　見学：今泊のノロ墓 8 月　見学：祭祀（古宇利ウンジャミ） 12 月　**研修：浦添ようどれ館，浦添城跡** 12 月　**研修：座喜味城跡，読谷村の史跡**
2014 年	8 月　見学：祭祀（具志堅シヌグ） 12 月　**研修：中城城跡，中村家住宅**
2015 年	3 月　**研修：故宮博物院ほか（台湾）** 9 月　見学：祭祀（ウプユミ） 9 月　見学：祭祀（城ウイミ）

注 1）「見学」は見学会，「研修」は研修旅行を示す．
注 2）今帰仁村歴史文化 C は今帰仁村歴史文化センターの略．

（今帰仁グスクを学ぶ会・編集委員会編（2015：109-111）により作成）

としたものである．表 2 は学ぶ会における見学会と研修旅行の訪問先を示した．これまで見学会は 17 回，研修旅行は 11 回実施されている．訪問先をみると，沖縄県内の各地を中心としつつ，とくに研修旅行では鹿児島県の沖永良部島や与論島，台湾の国立故宮博物院などへ訪れており，積極的に取り組まれていることがうかがえる．

また，学ぶ会では県内のガイド組織や文化団体（美ら島風景街道南北パートナーシップ [14]，やんばる学研究会，世界文化遺産地域連携会議など）との交流も盛んであり，毎年共同でのフィールドワークやワークショップ，研究発表会などが行われている．

以上に加えて，会員個々による自主的な学習もみられる．ボランティアガイドは利用者からの様々な質問に的確に応えられるように説明内容を定期的に作り直すことが多い．そのため，上記の学習機会のほかに学ぶ会所蔵の図書の読み込みや周辺図書館での学習を行っている．この所蔵図書は自主学習のために毎年購入されるものであり，現在の所蔵数は 300 冊を超えている．また，ボランティアガイドの中には休憩時間に先輩のボランティアガイドへ積極的に話しかけ，ガイドのノウハウやその知識を吸収する者もいる（卯田 2018）．

Ⅳ．高齢者におけるガイド活動と加齢

1. ガイド活動と身体的機能

学ぶ会のボランティアガイドが日々行っているガイド活動は主に次の 2 つの身体的機能を要する．第一に城跡およびその周辺史跡を巡るための体力や筋力，第二に説明内容の記憶力や利用者からの質問に即座かつ的確に返答できる判断能力である．

しかし，ガイド活動にとって不可欠なこれらの機能は加齢に伴い変化が生じる．具体的に，筋力は 60 歳以上になると動作時に必要な下半身の筋肉繊維が縮小し，また筋肉量も減少するため，必然的に低下する．この加齢による筋肉量の減少はサルコペニアと呼ばれ，60 ～ 70 歳では 5 ～ 13％，80 歳を超えると 11 ～ 50％の者にみられる．サルコペニアの主な身体的影響には変形性関節症や変形性脊椎症による足腰の痛みがある（桜井 2016）．また，記憶力や判断能力を含む認知機能は個人差

表 3　今帰仁グスクを学ぶ会における高齢のボランティアガイドの活動形態（2017 年 8 月）

番号	性別	年齢	活動開始年	活動頻度	加齢に伴う活動の影響	対策
1	男	60 代後半	2016 年	月 4 ～ 5 回	起伏による体力の消耗	歩行の工夫，ガイド中に適宜休憩
2	男	70 代後半	2005 年	月 15 回程度	体力の低下	活動頻度の調整，活動前に飲食・飲酒を控える
3	男	70 代後半	2005 年	月 3 ～ 4 回	記憶力の低下，説明内容の失念	活動頻度の維持
4	男	60 代前半	2010 年	月 3 回程度	ガイド後に疲労	日常的に健康管理
5	男	70 代前半	2005 年	月 5 ～ 6 回	起伏は気にならない，足腰に自信あり	特になし
6	男	70 代後半	2005 年	月 4 回程度	起伏による息切れ，足腰の痛み（後日まで続く）	飲食・飲酒の制限，自身の体力の自覚
7	男	80 代前半	2005 年	月 3 ～ 4 回	記憶力の低下，説明内容の失念，体力の低下	活動頻度をある程度維持，健康管理
8	男	60 代前半	2005 年	月 20 回程度	体調不良時の活動の負担	日常的に健康管理，ガイド時間の短縮
9	男	60 代後半	2012 年	月 2 回程度	起伏による足腰の痛み，複数回のガイドの負担	自身の体力に合わせて活動を調整
10	女	60 代前半	2016 年	月 1 回程度	影響なし	特になし
11	男	70 代後半	2007 年	月 1 ～ 2 回	体力の衰えが顕著，体調不良時の活動が不安	ガイド中に適宜休憩，往路のみで解散

（聞き取り調査により作成）

があるものの，概して機能低下が生じやすい．ただ，その変化は複雑であり，単純な記憶や技能に関する記憶は維持されやすいものの，作動動作は年齢を重ねるにつれて低下しやすいとされる（鈴木 2016）[15]．

本章はこうした身体的機能の変化とガイド活動の関係を検討する．本稿では学ぶ会事務局の協力のもと，60 歳以上のボランティアガイド 11 人に聞き取り調査を実施した．聞き取りでは活動開始年や活動頻度，参加動機などの基本的な質問に加えて，加齢によるガイド活動の具体的な影響やその意識，対策などを尋ねた．なお，ここでは対象とするガイド活動を一般的なコースであり，また多くのボランティアガイドが案内を行っている城跡内コースとする．

2017 年 8 月の聞き取りの結果，ボランティアガイドの多くが元々の興味・関心や自己成長，社会貢献意識などから学ぶ会に加入し，その後約 10 年に渡りガイド活動を続けていることがわかった．しかし，加齢による活動への影響については対象者の大半にあたる 9 人があると回答し，そのうち 8 人が体力や筋力の低下，2 人が記憶力および判断能力の低下を指摘していた（表 3）[16]．以下では，加齢とガイド活動の関係を「体力, 筋力の低下」,「認知機能の低下」,「影響なし」の 3 つに分け，それぞれの状況を検討する．

2. 加齢によるガイド活動の影響と対策

1）体力，筋力の低下

この身体的機能の低下は多くのボランティアガイドが指摘している（番号 1，2，4，6，7，8，9，11）．番号 1 はガイド活動の開始当初は体力面への不安はなかったが，近年は体力の低下を自覚するようになったという．とくに，上りの石段が続く平郎門から大庭へのルートは息切れや足腰の痛みが生じるようになった（図 6）．番号 1 によると，

図 6　今帰仁城跡の石段
（2017 年 4 月　筆者撮影）

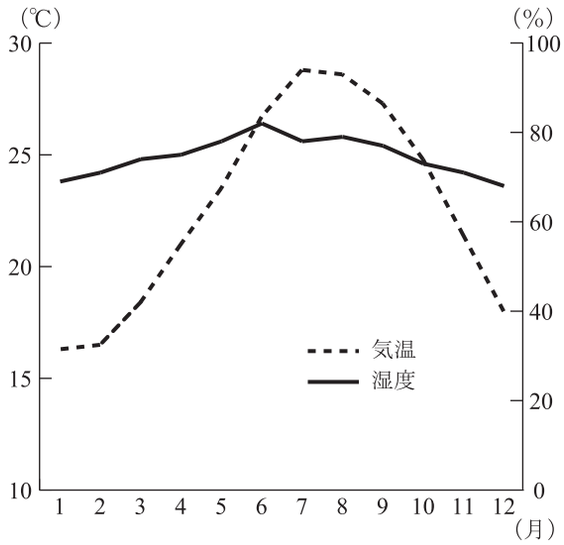

図 7　名護市における月別平均気温と湿度
注）値は 1981 ～ 2010 年の平均値を示す.
（気象庁気象統計情報により作成）

ガイド中は説明を伴った移動であるため，通常の徒歩よりも体力の消耗が激しいという.

番号 6 や 9 なども個人差はあるものの，石段による足腰の負担を指摘している．その中で，番号 6 は石段に対し以前はあまり気に留めることもなかったが，年齢を重ねるにつれて足腰が痛み，移動に困難を感じるようになった．また，痛みの程度は自身の体調や天候（とくに湿度）により異なり，日によっては激しい痛みが生じ，その痛みは翌日まで続くこともある．加えて，学ぶ会は年間を通してガイド利用が多いが，番号 9 によると夏から秋にかけての繁忙期といえる時期には多い日で 1 日 4 ～ 5 回のガイドを行うことも少なくないという．また，この期間は気温とともに湿度が平均約 70％と高いため（図 7），かなりの負担になる.

他方，ガイド中に加えて，ガイド後に身体の影響を指摘するボランティアガイドも存在する．番号 4 はガイド中においては利用者への説明やその緊張感からあまり影響がみられない．しかし，ガイドを終えると疲労が一気に現れるという.

次に，こうした様々な影響に対する各ボランティアガイドの対策を検討する．番号 2 は体力面を考慮し，ガイド活動の頻度をできる限り減らして加齢でも活動を継続できるような状況を作り出している．また，番号 2 と 6 は自身の身体的機能の低下を自覚したころから，活動前日には飲食・飲酒を制限し，体調を整えるようにしている．番号 4 はガイド活動を意識した特別な対策は行っていないものの，普段の生活から適度に運動し，健康維持を図っている.

こうした日常的および活動前日のいわば事前準備に加えて，ガイド中に様々な工夫を取り入れているボランティアガイドもみられる．番号 1 は上記のように身体的負担を自覚するようになった．近年はこの対策として，1 回のガイドであまり体力を消耗しないようにゆっくり歩くことを心がけている．また，詳しい説明を要する時はできる限り木陰へ移動し，そこで休憩を取りながら説明している．さらに，番号 8 や 11 はガイド中に体調不良が生じた際，通常の往復のルートを取りやめ，往路のみで解散したり，ガイド時間を短縮したりするなどの工夫を行っている.

他方，学ぶ会による配慮もみられる．ボランティアガイドの中には急な体調不良により，活動予定日を欠席する者がいる．ボランティアガイドは先述のように平日 2 人，土日祝日 3 人が常駐しているが，学ぶ会はこうした緊急の欠員に対し，今帰

仁村周辺に居住し，急な連絡でも対応可能なボランティアガイドを複数名確保している．

また，学ぶ会は活動日にペアとなるメンバーの年齢も考慮している．学ぶ会では各ボランティアガイドの希望をもとに1か月分の活動予定日を作成している．その中で，高齢のボランティアガイド同士がペアとなった場合は，ガイド中の急な体調不良などを想定し，いずれか1人を年齢が比較的若いボランティアガイドに変更するようにしている．高齢のボランティアガイドによると，このペアの配慮はガイド活動に安心感を与えるとして評価が高いという．

2）認知機能の低下

ボランティアガイドの中には体力や筋力の低下はあまりないものの，認知機能の低下によるガイド活動の影響を指摘する者がいる．そのうち，番号3は記憶力の低下を述べている．番号3によると，ガイドの説明内容はルート上の地点に基づいて記憶していることが多く，定期的にガイド活動を行っていると感覚的に説明することができる．しかし，体調を崩すなどして活動を一定期間休止すると，説明内容や様々な状況への対応が希薄になってしまう．また，この感覚が鈍ると利用者からの質問に的確に返答できなくなり，それがガイド活動自体の自信喪失や不安につながるという．

こうした認知機能の低下に対し，ボランティアガイド個人においては記憶を維持するために活動頻度を一定に保つことが重要となる．しかし，番号7は認知機能とともに，体力面の低下についても不安視している．ただ，体力面を考慮して活動頻度を下げると，自身が考えるガイド活動ができなくなる．そのため，番号7は日々の運動や体調管理を常に心がけているという．

また，番号3と7はこうした体調管理だけでなく，学ぶ会が提供する勉強会や見学会に参加したり，自主学習を積極的に行ったりすることで，機能維持を図っている．番号3によると，学ぶ会では多様な学習機会を有しており，それらに参加し刺激を受けることは，認知機能の維持・向上において重要であるという．

3）影響なし

以上の様々な影響の一方で，現状ではとくに影響がみられないボランティアガイドも少数ながら存在する．番号5は学ぶ会の設立時から参加し，ガイド活動を10年以上続けているが，ほかのボランティアガイドにみられた石段による足腰の痛みや認知機能の低下などは感じていない．また，当初からの活動頻度を現在まで変えていない．番号5によると，学ぶ会への参加以前からアウトドアを趣味としており，足腰には自信があったという．番号10は年齢が比較的若く，加えて番号5と同様に体を動かすことが好きであったため，現在のところガイド活動に身体的な不安を感じていない．さらに，番号10は普段から体調管理に留意し，健康維持を心がけている．

こうした身体的影響がみられないボランティアガイドは加齢の問題が自身と直接的に関係しないため，身体的機能を不安視するボランティアガイドへの理解や共感はあまり高くない傾向にある．しかし，学ぶ会によると，ガイド活動日やガイドミーティング，また研修旅行などの場において，ボランティアガイド同士が様々な会話をすることで，次第に加齢の実情やガイド活動時の影響を理解していくという．とくに，ガイド活動日は日によって待機時間が長時間となることもあり，その際の世間話や健康問題などの語り合いが，高齢のボランティアガイドへのサポート意識につながるという．

Ⅴ．高齢者におけるガイド活動の継続要因

学ぶ会における高齢のボランティアガイドは加齢に伴う様々な影響を受けながらも，継続的にガイド活動を行っていた．その要因として以下の2点を指摘することができる．

第一にボランティアガイド個々における加齢への対策である．そこでは，主としてガイド活動前とガイド中の2つの段階の対策がみられた．前者では活動頻度の調整や日常的および活動前日における健康管理，ガイド知識の積極的な吸収などを行うことで，ガイド活動に不可欠な身体的機能の維持を図っていた．また，ガイド中には体力の消耗を防ぐ工夫として，歩行速度の加減や木陰での

説明などが取り入れられていた．さらに，ボランティアガイドの中には活動日の体調に合わせて，往路のみの説明やガイド時間を短縮する者も存在した．これら2つの段階における対策では，ボランティアガイドが自身の加齢の現状を十分に自覚し，その現状に応じたガイド活動環境を再構築していくことが重要であった．

一方，活動の継続にはボランティアガイド個々の努力だけでなく，学ぶ会の取り組みや運営の仕組みも大きな役割を果たしていた．この点が第二の要因として挙げられる．具体的には，急な欠員に備えた人員確保や比較的年齢の若いボランティアガイドとのペアによる活動などである．とくに，後者はガイド活動に安心感を与えるものとして高齢のボランティアガイドの中で評価が高かった．

また，こうした取り組みに加えて，学ぶ会の運営の仕組みそれ自体もボランティアガイドの継続的な活動に寄与している．学ぶ会が実践するサポートには若手を含む組織全体の意識共有が必要である．この点に関して，ガイドミーティングやガイド活動日などの日常的な場，さらには学ぶ会が積極的に実施している学習機会（見学会，研修旅行など）の場におけるメンバー間のコミュニケーションが加齢の理解やその共有を促していた．また，これら学習機会は認知機能の維持・向上にもつながっていた．

他方，学ぶ会はガイドの説明内容に明確な基準を設けていなかったが，この点もガイド活動を継続する上で有利であると考えられる．すなわち，先述のように高齢のボランティアガイドは体調不良などから時に往復のコースを往路のみで終えたり，時間短縮を行ったりしていたが，説明内容に明確な基準があればこうしたガイド活動を行うことは困難である．しかし，学ぶ会のようなガイド基準においては身体面を考慮した上でのガイド活動を行うことが可能であるといえる．

Ⅵ．おわりに

本稿は学ぶ会を事例に，高齢のボランティアガイドのガイド活動の特徴とその継続要因を当事者への聞き取りをもとに検討した．ガイド活動は近年の学習型・教養型観光の需要拡大の中で注目されてきたが，一方でガイド組織の多くはボランティアガイドの高齢化の問題を抱えている．本稿で対象とした学ぶ会もほかのガイド組織と同様に会員の平均年齢は高かった．しかし，聞き取りを行った高齢のボランティアガイドの多くは10年近くの活動経験を有していた．

それらボランティアガイドは長期に渡る活動を続けているものの，Ⅳで詳述したように加齢に伴う身体的機能の変化がみられた．そこでは，体力や筋力の低下，急な体調不良，認知機能の低下などが生じていた．とくに，大庭へと至る長い石段は高齢のボランティアガイドにかなりの身体的負担を与えていた．しかし，彼らはこれら多岐に渡る影響を単に不安視しながら活動を行っているわけではなかった．ボランティアガイドの多くは自身の変化する身体的機能の現状を自覚し，その現状に適した活動環境を自ら作り上げていた．一方，こうした活動を続けていくには学ぶ会による様々な配慮も重要な役割を果たしていた．また，学ぶ会では多様な学習機会や柔軟なガイド基準といった運営方針が，継続的なガイド活動を促進していた．

以上の個々のボランティアガイドとガイド組織相互による活動の場の形成は先行研究で言及されてこなかった点であり，新たな知見として意義があると考えられる．とくに，多様な学習機会が先行研究で述べられた人材育成の文脈だけでなく，加齢に対する意識共有や認知機能の維持・向上にも寄与するとの指摘は新規性を有する．Ⅰでも述べたように，現在のガイド組織の多くは高齢のボランティアガイドにより成り立っている．そのため，組織を維持するには高齢のボランティアガイドがいかに長期に渡って活動できるかが重要となってくる．その際には，本稿で明らかにしたボランティアガイドとガイド組織それぞれの実践が重要な示唆を与えてくれるのではないだろうか．

本稿は学ぶ会の主要なガイドコースである城跡内コースのガイド活動を対象に検討した．ただ，学ぶ会ではこのコースのほかに「周辺史跡めぐりコース」があり，またガイド以外の取り組みも盛んである．ボランティアガイドによると，こうした諸活動を積極的に行う会員がいる一方で，それ

らを負担と感じる会員もいるという．近年のガイド組織には学習型・教養型観光の高まりに連動する形で，学ぶ会のように取り組みを多角化する組織も少なからずみられる．今後はこうしたガイド以外の取り組みを含めた活動の実態とその意識についても検討していく必要がある．

また，学ぶ会のガイドコースは通常，城跡内コースのみの提供とガイド活動は限定的である．しかし，ガイド組織の中には複数のコースを設定し，ボランティアガイドが利用者の希望に応じて様々なコースを案内する組織も存在する．これらの組織は学ぶ会と比べ，ボランティアガイドの身体的負担は大きいものと考えられる．今後はこうした学ぶ会とは異なる活動形態をもつガイド組織を検討し，学ぶ会との共通点や相違点について議論を深めていくことも必要であるだろう．

本稿の作成にあたり，今帰仁グスクを学ぶ会の仲嶺盛治氏（会長），山内道美氏（同会事務局長）をはじめとするボランティアガイドの皆様には，長時間かつ複数回にわたる聞き取りにご協力頂きました．末筆ながら，記して感謝申し上げます．

本研究の一部は2017年7月に開催された2017年度沖縄地理学会大会（琉球大学）において発表した．本研究は平成27年度科学研究費補助金基盤研究（A）「世界遺産の創造と場所の商品化に関わる理論的・実証的研究」（研究代表者：松井圭介）の一部を使用した．

（受付2018年3月10日）
（受理2018年6月20日）

注

1）この調査は日本観光振興協会が2014年12月～2015年1月にかけて実施したアンケート調査をまとめたものである．日本観光振興協会によると未回答の組織も一部あり，数値は一つの目安と位置づけられている．

2）以下では，本稿の研究対象である地域の人文・自然資源を案内する観光ボランティアガイドに関する研究動向を述べる．

3）ここで言う学習機会とは，ボランティアガイドがガイド知識を習得するための勉強会や講演会，研修，自主学習などの機会のことを指す．

4）先の日本観光振興協会の調査（2015年）では，全国におけるボランティアガイドの平均年齢は64.3歳である．

5）高齢者の定義は様々であるが，本稿では一般的認識と言える60歳以上の者を高齢者とする．

6）高齢者介護予防ボランティア・ポイント制度とは，ボランティア活動時間に応じたポイントにより特産品引換券と交換できる制度である．対象年齢は65歳以上である．また，よこはまシニアボランティアポイント制度もほぼ同様の仕組みである．

7）後述するように，学ぶ会にはガイド活動を行うガイドの部と一般会員・賛助会員の部がある．この数は現在活動中のガイドの部のボランティアガイド数を示している．

8）卯田（2018）では，学ぶ会のガイド組織としての発展要因を，メンバー間のコミュニケーション，財源基盤，多様な学習機会の3つの観点から考察した．本稿では高齢のボランティアガイドに注目し，ガイド活動の継続要因を明らかにする．

9）沖縄県企画部統計課「平成26年度沖縄県市町村民所得」（www.pref.okinawa.jp/toukeika/ctv/h26/00all(h26).pdf　2018年3月21日閲覧）による．

10）この運営費は「今帰仁グスク通信第7号」掲載の2007年度のデータを参照した．

11）事前予約は先述のように有料である．城跡内コースの事前予約は1～4人が1人500円，5人以上（25人まで）は2,500円，周辺史跡コースはガイド時間が2時間の場合は3～15人までが1人1,000円，3時間以上の場合は3～15人までが1人2,000円となる．また，周辺史跡コースは桜まつり（1月下旬～2月上旬）期間中の特別企画として開催されることもあり，その際は料金が割引される．

12）この記事は学ぶ会設立初期の会誌に掲載されたものであり，会員10人程度がリレー形式で自身の説明内容やその方法を述べている．

13）学ぶ会のホームページは2010年1月に開設された（今帰仁グスクを学ぶ会・編集委員会編2015：95）．

14）美ら島風景街道南北パートナーシップとは，北部地域のNPO団体，市民団体，行政などが連携し，「やんばる」の魅力を伝えることを目的としたプロジェクトである．

15）作動動作とはあることを覚えながらほかの作業を

する際の記憶である（鈴木 2016：51）.

16）番号 7 はいずれの変化も指摘している.

文　献

阿久津千晶・十代田　朗・津々見　崇（2016）：都市部のまち歩きガイド組織の特徴とガイドの個人特性と意識に関する研究．観光研究，28（2），81-92.

安　勝熙（2006）：地域観光ボランティアガイドと高齢者の生きがいとの接点を目指して．ツーリズム学会編集員会編『新ツーリズム学原論――自由時間社会の豊かさの質とは――』東信堂，209-227.

池田大志・上田直樹・杉本　隆・松村　弘（2008）：今帰仁村における観光の現状と将来の観光戦略．関西大学文学部地理学・地域環境学教室編『沖縄県今帰仁村の地理 2007 年度』関西大学文学部地理学・地域環境学教室.

磯野　巧（2016）：徳島県徳島市における観光ボランティアガイド活動の地域的展開．観光研究，27（2），59-70.

磯野　巧（2017）：観光ボランティアガイドの人材育成方式――三重県津市の事例――．地理，62（11），49-57.

今井成男（2003）：観光ボランティアガイドの現状と課題――中国地区の事例から――．岡山商大社会総合研究所報，24，43-88.

卯田卓矢（2018）：文化遺産と観光ボランティアガイド――今帰仁グスクを学ぶ会の活動から――．新垣裕治・大谷健太郎編『やんばるブックレット（仮）』沖縄タイムス社，印刷中.

大社　充（2008）：『体験交流型ツーリズムの手法――地域資源を活かす着地型観光――』学芸出版社.

岡本秀明（2012）：高齢者のボランティア活動および友人・近隣援助活動に関連する要因. 厚生の指標, 59（5），14-19.

加藤麻理子・下村彰男・小野良平・熊谷洋一（2003）：地域住民による観光ボランティアガイド活動の実態と動向に関する研究．ランドスケープ研究：日本造園学会誌，66（5），799-802.

兼子　純・新名阿津子・安河内智之（2004）：古河市における中心市街地の変容と都市観光への取り組み．地域調査報告，26，123-150.

古谷野　亘（2003）：高齢期をみる目．古谷野　亘・安藤孝敏編『改訂・新社会老年学』ワールドプランニング，13-26.

桜井良太（2016）：高齢者の身体機能に関する特徴．藤原佳典・倉岡正高編（2016）：『コーディネーター必携 シニアボランティアハンドブック――シニアの力を引き出し活かす知識と技術――』大修館書店，34-47.

佐々木一成（2008）：『観光振興と魅力あるまちづくり』学芸出版社.

佐竹真一（2013）：観光ボランティアガイド協会の役割と未来像――堺観光ボランティア協会の事例研究からの教訓――．大阪観光大学紀要，13，45-55.

澤岡詩野・渡邉大輔・中島民恵子・大上真一（2017）：都市高齢者のボランティア活動継続への意向に関する分析――よこはまシニアボランティアポイント制度登録者における検討――．応用老年学，11（1），61-70.

鈴木宏幸（2016）：高齢期の認知機能とコミュニケーション．藤原佳典・倉岡正高編（2016）：『コーディネーター必携 シニアボランティアハンドブック――シニアの力を引き出し活かす知識と技術――』大修館書店，48-64.

中條曉仁（2007）：高齢社会に関する地理学的研究の再検討――「ポジティブな高齢者」像の構築に向けて――. 静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇），58，1-13.

中原　純（2005）：高齢者のボランティア活動に関する研究の動向――シニアボランティアの現状と課題――．生老病死の行動科学，10，147-155.

中原　純（2014）：プロダクティブ・エイジング――社会で活躍する高齢者――．日本老年行動科学会監修『高齢者のこころとからだ事典』中央法規出版，36-37.

今帰仁グスクを学ぶ会・編集委員会編（2015）：『今帰仁グスクを学ぶ会会誌 「今帰仁グスク」十周年記念特別号』今帰仁グスクを学ぶ会.

今帰仁村役場総務課（2016）：『2012 年（平成 24 年）村勢要覧（2016 年一部改訂版）』今帰仁村役場総務課.

バトラー R.N.・グリーソン H.P. 編, 岡本祐三訳（1998）：『プロダクティブ・エイジング――高齢者は未来を切り開く――』日本評論社．Butler，R.N. and Gleason,

H.P.（1985）: *Productive Aging* : *Enhancing vitality in Later Life*. Springer, New York.

深見　聡（2009）: 観光ボランティアガイドの台頭とその意義――『篤姫』ブームを事例として――. 地域総合研究, 37（1）, 45-56.

藤原佳典・倉岡正高編（2016）:『コーディネーター必携 シニアボランティアハンドブック――シニアの力を引き出し活かす知識と技術――』大修館書店.

フンク・カロリン（2008）:「学ぶ観光」と地域における知識創造. 地理科学 63（3）, 160-173.

前田信彦（2006）:『アクティブ・エイジングの社会学』ミネルヴァ書房.

松井圭介（2013）:『観光戦略としての宗教――長崎の教会群と場所の商品化――』筑波大学出版会.

望月七重・李　政元・包　敏（2002）: 高齢者のボランティア活動（参加・継続意向）に影響を与える要因――高齢者大学の社会還元活動実態調査から――. 関西学院大学社会学部紀要, 91, 181-193.

安福恵美子（2014）: 地域資源と「観光ボランティアガイド」の関係性に関する一考察. 愛知大学綜合郷土研究所紀要, 59, 101-114.

横山秀司（2009）: 観光ボランティアガイドとは――全国で活躍するボランティアガイドさん――. 地理, 54（9）, 23-33.

吉岡走馬・上田将輝・久保　静・東岡　侑・吉廣勇佑・渡部杏奈・米田誠司（2015）: まちあるきガイドにおける観光価値の創造過程. 愛媛経済論集, 34（3）, 27-57.

竜王真紀（2014）: 高齢者ボランティア活動の継続に必要な要因分析と支援策の検討――高齢期に必要なヘルスプロモーションへの展開――. 滋賀社会福祉研究, 16, 29-34.

林　懿嫻・東　秀紀・岡村　祐（2012）: 横浜市の観光ボランティアガイド組織に関する研究――その育成方式を中心にして――. 観光科学研究, 5, 95-106.